

《本号の表紙絵》

コッホ博士来名記念 1908

ローベルト・コッホ (Heinrich Hermann Robert Koch 1843–1910) は1908年(明治41)6月12日から8月24日まで、門下の北里柴三郎(1853–1931)の招きで日本を訪問、横浜に上陸し、明治天皇に拝謁、いくつかの都市、日光、宮島、高松など各地を旅行した。おそらくどこの土地においても大いなる歓迎を受けたと思われる。名古屋においても例外ではなく、1泊2日の滞在であったが絶大な歓迎を受けた。この写真は名古屋訪問の時、愛知県会議事堂(名古屋市中区南武平町(現中区栄4丁目と5丁目の一部))前で撮影されたもので、中央にコッホ博士、その左に北里柴三郎、志賀潔(1871–1957)、北川乙次郎(1860–1922)(顎鬚)、前列シルクハット着用が加藤重三郎名古屋市長、市長の右が熊谷幸之輔(1857–1923)愛知医学学校長、校長の3人後が川原汎(1858–1918)である。

今回の第120回日本医史学会のテーマは「医史学の新たな展望 健康長寿社会を拓いた先哲から学ぶ」と言うことで、これらの人物の内、川原汎と北里柴三郎が取り上げられている。

名古屋滞在の主な行動を川俣昭男著『ローベルト・コッホ博士日本紀行点描』によってまとめる。7月30日4時10分コッホ夫妻が名古屋駅に到着すると同時に21発の号砲が轟いた。愛知県差回しの馬車にコッホ夫妻と北里柴三郎が、他の馬車には加藤重三郎、北川乙次郎、熊谷幸之輔が乗って名古屋ホテルに向かった。歓迎者の歓呼の内にホテルに入場、小休止の後、愛知県議事堂で開かれる歓迎式典に臨んだ。総員一同起立して迎えた。北川博士が開会宣言し、加藤市長が歓迎の言葉を述べた(北川の通訳)。コッホは北里の通訳で答辞を述べた。「日本は風光の美なるのみならず、進歩発達速かなる国なり。日本人は勤勉にして熱心なり。日本が政治上に於て將た経済上に於て、又科学上に於て世界に雄飛するの日は蓋し近き将来なるべし。余は今此国に來り、此国民に歓迎を受く。誠に光榮とする所なり云々」。その後君が代を奏し、横井軍医監(1847–1891)の発声にてコッホ博士万歳三唱が称せられ、熊谷氏の閉会の辞をもって式が終った。玄関前にて撮影され一行は再び馬車にて名古屋ホテルに帰った。この写真はまさにその時のものである。ホテルにて晚餐のあと、夜9時から御園座にて名古屋踊り、吾妻八景などを鑑賞した。

翌31日朝9時半、名古屋ホテルから再び馬車に乗り名古屋城を拝観、続いて名古屋城西側にある好生館病院を巡覧された。その後ホテルで休み午後4時10分名古屋駅を出発し岐阜に向かった。

炭疽菌、結核菌、コレラ菌を発見し、ノーベル生理学・医学賞を受賞されたコッホ博士の姿から神々しさに近い威厳と品格を感じる写真である。

写真は名古屋大学図書館医学部分館蔵、『名古屋大学メモリー、創基から新制名古屋大学へと至る歴史資料解説図録』を参照した。